荒川港について

・幕末時代の荒川は、河口で胎内川も合流しており、桃崎港・海老江港・塩谷港の３港があり、総称して荒川港と呼ばれていた。

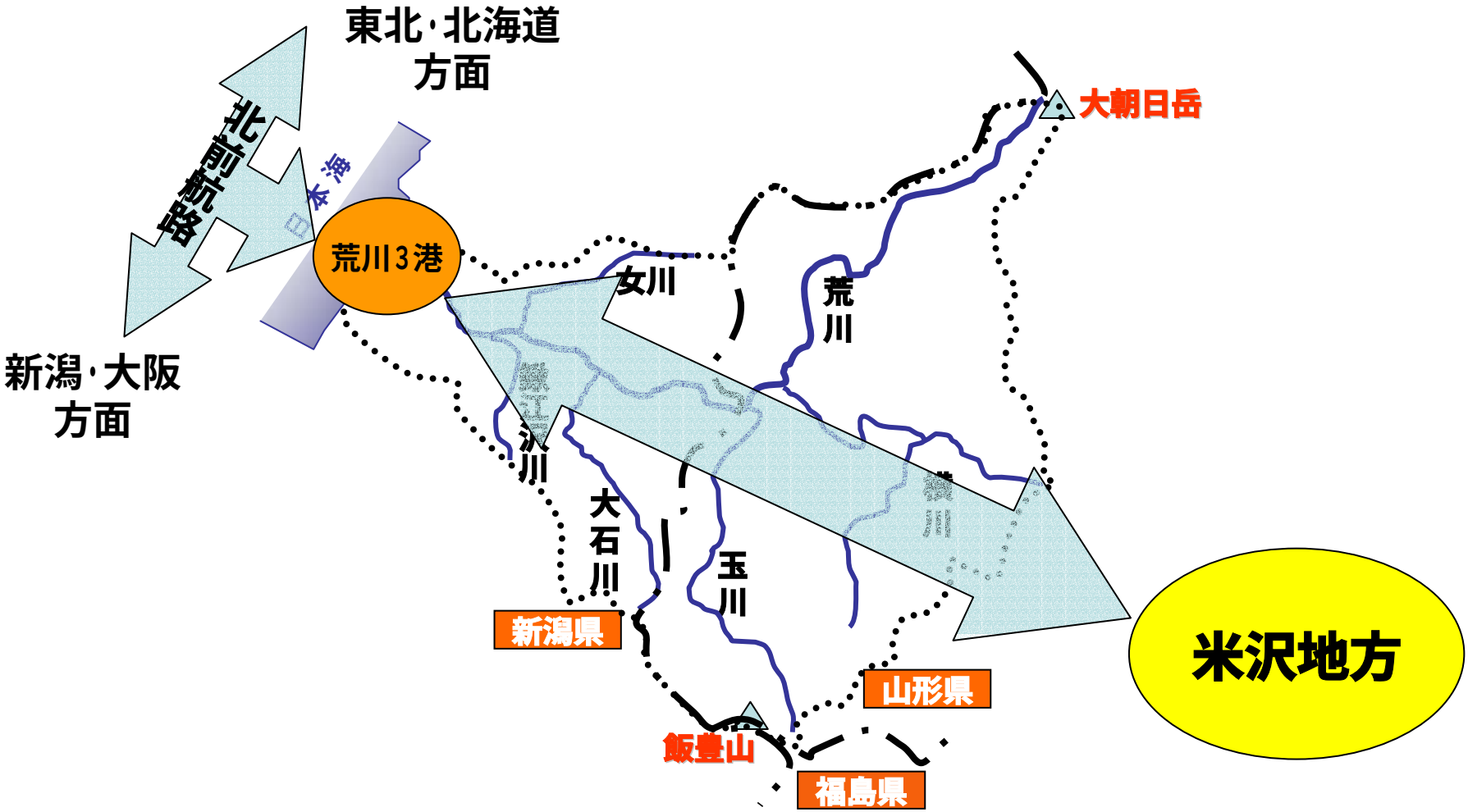
・港は下越沿岸随一の良港として知られ、廻船問屋が繁盛し、荒川筋・胎内川筋の年貢米などが船積みされて、北前船で南は瀬戸内海、北は北海道方面にまで物資が運ばれた。

　また、荒川上流の米沢地方との流通の結節点としても活用された。

・胎内川が現在の場所に掘りおとされ、乙大日川となってからは川跡は開墾され、港は沼地となったことから、海老江港は大正１５年に終止符が打たれた。

江戸から明治･大正にかけて

- 輸送手段として、舟運が大きな位置を占めた。



明治･大正から昭和にかけて

- 鉄道、道路といった陸上交通の発達